

第一部 講演4

小半夏加茯苓湯がオピオイド鎮痛薬の副作用軽減に有用であった慢性疼痛の2症例

仲田 幸世 先生

武南病院附属クリニック 整形外科

1997年 東海大学医学部 卒業
1999年 総合会津中央病院 整形外科
2004年 大久保クリニック 整形外科
2012年 光陽病院 整形外科
2014年 武南病院附属クリニック 整形外科

はじめに

整形外科を受診する慢性疼痛患者に対してオピオイド鎮痛薬は有用だが、悪心・嘔吐、便秘、食欲不振などの消化器系副作用を生じることが知られており、その副作用のため治療継続が困難となることも少なくない。制吐剤や緩下剤などの併用で解決できることもあるが、嘔吐や便秘のコントロール不良は疼痛治療の妨げとなることがある。

症 例 1

症 例：45歳 女性。

主 訴：数ヵ月前より続く左肩痛。

現症・初診時所見：図1に示す。

臨床経過(図2)：2週後、疼痛の軽減が弱く、特に夜間痛が強かった。貼付剤はかぶれのため使用を中止した。また、オピオイド鎮痛薬を徐放製剤に変更し、副作用予防のためメトクロプラミドを追加した。4週後に嘔吐が出現したため越婢加朮湯を中止し、小半夏加茯苓湯を処方したところ、嘔吐は6週後に1回のみであり、痛みも落ち着いてきた。

8週後には吐き気も落ち着いてきたことからメトクロプラミドを中止し、オピオイド鎮痛薬と小半夏加茯苓湯の処方を継続した。その後、痛みは一時的に増悪するも軽快し、オピオイド鎮痛薬と小半夏加茯苓湯は疼痛時のみの頓用とした(図2)。

図1 症例1 45歳 女性

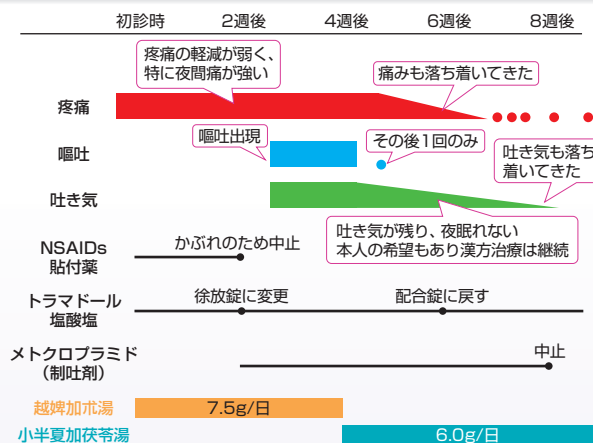
現 症

身長：159.5cm、体重：44kg、BMI：17.3
小柄・やや痩せ型。
1ヵ月前より続く左肩痛のため受診した。
レントゲン上異常はないが、可動域に制限あり。
神経質、口渇(－)

初診時

疼痛が強く、
● 関節内ステロイド注射
● エスフルルビプロフェンテープ(NSAIDs) 1枚/日
● ترامドール塩酸塩・アセトアミノフェン配合錠(オピオイド鎮痛薬) 1錠/日
● 越婢加朮湯 7.5g/日
を処方した。

図2 臨床経過



その後、一時的に痛みの増悪はあったものの、痛みは軽快し、痛みがあるときだけ頓用でトラマドール・アセトアミノフェン配合錠+小半夏加茯苓湯を24週後まで継続した。以後来院なし。

図3 症例2 73歳 男性

主 訴

両側坐骨神経痛。

現 症

腰部脊柱管狭窄症と診断。

寒冷・雨の前日の疼痛増悪あり、便秘があると嘔気もあらわれる。

既往歴

X年6月よりプレガバリンを投与するも、めまい・ふらつきなどの副作用のため服用を中止した。

以後、X+3年まで主に

● トラマドール塩酸塩徐放錠 100～300mg/日

● センノシド 12mg (頓用)

● 酸化マグネシウム 330mg/日

にて疼痛と便秘をコントロールしていた。

症 例 2

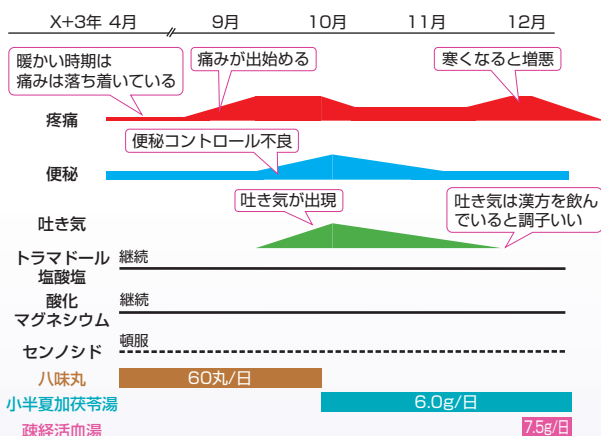
症 例：73歳 男性。

主 訴：両側坐骨神経痛。

現症・既往歴：図3に示す。

臨床経過(図4)：4月以降の暖かい時期には痛みは落ち着いていたが、9月頃から痛みが開始した。便秘もコントロール不良であった。10月になると上腹部のむかつき、吐き気が出現したため、4月から投与していた八味丸を中止し、小半夏加茯苓湯を投与したところ、その後は症状が軽快していた。寒くなると疼痛が増悪することから疎経活血湯を追加した。その後も疼痛は残存するもののオピオイド鎮痛薬の処方継続できた。

図4 臨床経過



その後、痛みはまだあるものの、オピオイド鎮痛薬の処方継続できている。
排便コントロールがうまくいかず、便秘に伴い出現した吐き気に対して小半夏加茯苓湯が奏効した。

考 察

オピオイド鎮痛薬は慢性疼痛の緩和に有用だが、治療継続のためには消化器系の副作用のコントロールが重要である。

小半夏加茯苓湯は半夏・生姜・茯苓の3生薬で構成される切れ味の良い処方であり、安全性が高いことから高齢者にも使用しやすい処方であり、オピオイド鎮痛薬の投与初期にみられる急性の症状と、投与中～長期にみられる遅発性の症状のいずれにも有効であった。

まとめ

オピオイド投与中に生じた消化器系副作用に対して小半夏加茯苓湯を処方したところ奏効した。小半夏加茯苓湯は即効性もあることから頓用でも使用でき、オピオイドの長期使用時にも副作用の懸念の少ない併用薬として適していると考えられる。

Discussion

木村：吐き気に対して繁用される半夏瀉心湯、五苓散との鑑別について教えてください。

仲田：小半夏加茯苓湯の悪阻にも使用できる高い安全性を考慮すると、高齢者にも幅広く使用可能であることから、小半夏加茯苓湯を第一選択としています。

木村：便秘を伴う吐き気に有効でしたが、便秘も改善するということですか。

仲田：下剤を使用すると下痢になるなど便通のコントロールが困難な場合は、小半夏加茯苓湯を使用することで便通コントロールが付きやすくなる印象があります。

木村：小半夏加茯苓湯の頓用について、使い方のコツを教えてください。

仲田：吐き気が出現する前に上腹部が重くなるとの訴えから、「ちょっと胃が重い、何となくおかしい」というタイミングで服用していただきます。